

開成まちづくり協議会(生活・環境部会)と開成校区自主防災会は 合同で

雲仙・普賢岳平成噴火による災害を学ぶ防災セミナーを開催しました！

令和6年11月24日(日)、島原の空は青かった。サムライブルー龍馬像が見え始めると、がまだすドームの駐車場に到着、隣接する島原復興アリーナでは産業祭が開催中で、家族連れなど多くの人で賑わっていました。穏やかな秋日和の中、私たちは島原の地に立ちました。

ここは、平成2年(1990)年11月17日に雲仙・普賢岳が寛政4年(1792)年の「島原大変」以来198年ぶりに噴火し、その後平成3年5月20日には溶岩ドームが出現、そして6月3日には大火砕流が発生、43名の犠牲者が出る大惨事が発生したところでもあります。土石流でも甚大な被害がありました。

これから、雲仙・普賢岳の噴火災害がどういうものだったのか、人々はどう対応したのか、そして災害後の防災対策などはどうなったのか、などを学ぶための防災セミナーを現地島原で開催することになりますが、より理解が進むよう島原半島観光連盟を通じてジオガイドに案内をお願いしました。



★がまだすドームの付近には、雲仙・普賢岳の噴火で
向こうには平成新山や眉山が見えます。
転げ落ちた巨岩が展示されていました。圧巻です。

【 がまだすドームの見学で分かったこと 】

まず、がまだすドームに向かうと、予約していたジオガイドの大石さんと松尾さんが笑顔で出迎えてくれました。マイクを頭部に装着されて聞き取りやすい口調で自己紹介されました。これからどんな語りがあるのだろうか、と期待感が高まります。参加者の皆さん、これまで島原に来たことはあっても、専門ガイドによる説明はおそらく初めてと思われ、現地で防災セミナーを開催した良かったなぁと思いました。開成まちづくり協議会(生活・環境部会)は大石ガイド、開成校区自主防災会は松尾ガイドの案内となります。

さて、「がまだす」とは島原地方の方言で「がんばる」という意味ですが、土石流が有明海を埋めてできた新しい陸地に建設された施設、火山の全てを体験できるわが国で初めての体験型ミュージアム「雲仙岳災害記念館」は、愛称を「がまだすドーム」と呼ばれています。今日は日曜日、中に入ると大勢の来館者で賑わっています。見渡すとスタッフの皆さんが忙しく対応に追われ、活気が漂っています。



《ドームを背にして平成新山などに見入る皆さん》



《がまだすドームが入館を待っています》

最初に、セットが組み立てられていて火砕流が勢いよく流れていく様子をスタッフから説明がありました。実際に火砕流を浴びた木々などが強化ガラスの下に置かれており、足元でアッという間に火砕流に見立てた光が流れていきました。瞬時ともいえる猛スピード、これでは到底逃げ切れるものではありません。避難計画の作成・周知と早い避難を実感しました。



《スタッフの説明後、火砕流に見立てた光が足元を瞬時に通過し、火砕流の恐ろしさが理解できました》



← 漫画風立体紙芝居「島原大変シアター」

舞台の片隅でおじいさんが、江戸時代に起こった「島原大変肥後迷惑」を漫画風に作成された人物・背景の流れとともに方言で語ります。

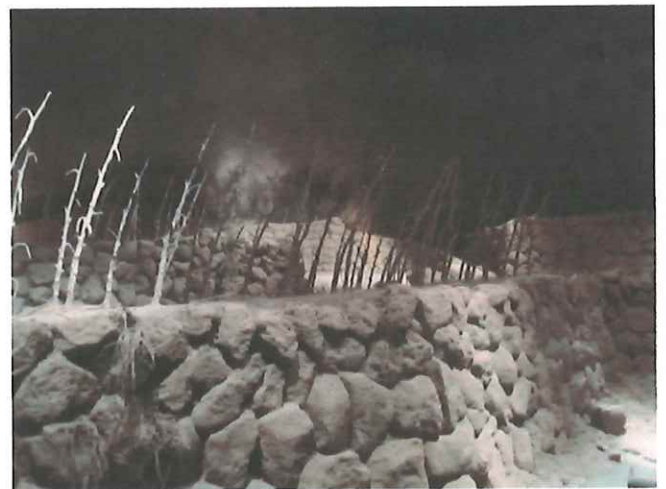
島原大変肥後迷惑とは、江戸時代の1792年5月2日に雲仙岳の火山性地震と眉山の山体崩壊(島原大変)と、それがもとで発生した津波が対岸の肥後国(肥後迷惑)や島原を襲った災害で、肥後国で5千人、島原で1万人が亡くなったもので、日本史上最大規模の火山災害。新月の夜かつ大潮であったことで大災害になったとされる。

ところで、がまだすドームのHPを見ると、「見て触れてリアルに体感する日本初の火山体験ミュージアム」とあって、「火山の猛威と人との共生を考える常設展示」と紹介されています。大噴火の際に火砕流や土石流が広がっていった範囲をプロジェクションマッピングで表現した「平成噴火ジオラママッピング」のコーナーでは、大石カイドから火砕流が下って行った様子や被害の状況について説明がありました。



《眉山や平成新山、島原の市街地が一望に俯瞰できるジオラマで火砕流が広がった様子が分かります》

次に向かったのは、平成3年(1991年)6月3日に発生し、43名が亡くなった安中地区の現場を再現した展示コーナーです。この地区は有数な葉タバコの産地だったのですが、一瞬にして灰燼に帰しました。



▲被災当時の安中地区の生活状況や火砕流による被災の様子を語る大石ガイド▲



「火砕流の熱で焼けたカメラ機材」

向かって右側から読売新聞、毎日新聞の望遠レンズ、そして日本テレビのカメラマンが使っていた三脚です。日本テレビの三脚は脚が曲がっているように見えますが、これは、火砕流の熱で溶かされたように形を変えられました。カメラマンを襲った溶岩の痕跡が、三脚を溶かし、くっついてます。



▲取材中に火砕流によって亡くなったカメラマンの機材。遠方には自衛隊員着用の防護服が見えます▲

【砂防みらい館及び旧大野木場小学校被災校舎の見学で分かったこと】

がまだすドームの見学を終え、旧大野木場小学校被災校舎に向かいました。バスに乗って、島原の市街地を抜けると、農地となりハウスが見えます。やがて目の前に平成新山の山塊が圧倒するかのよう迫ってきます。今から44年前に火砕流がゴウゴウと下っていった地域に今いるのですから、恐怖すら覚えます。



★砂防みらい館(国土交通省設置)、正式名称は大野木場監視所と旧大野木場小学校。平成新山との位置関係や距離感が分かります。

★雲仙・普賢岳には巨大な溶岩ドームが山頂部に不安定に存在し、豪雨や地震により大崩壊の危険性があることから溶岩ドームの監視、砂防工事従事者等の避難場所や無人化施工操作室を確保するため、平成14年9月に開設されたのが、砂防みらい館です。

平成3年(1991年)9月15日18時54分に発生した大火砕流により付近の民家など153棟とともに小学校は全焼。深江町では避難が徹底し人的被害はなかったが、この災害の驚異と自然災害のすさまじさを継承する火砕流遺構や砂防学習の拠点の一つとして保存されている。ガイドさんによれば、風化防止のコーティングを過去2回実施しているそうで、費用は2千万ほど/回とのこと。



▲砂防みらい館でビデオ上映、火砕流が迫ります



▲熱風でひしゃげた手すり、焼失した教室に驚く



▲校長室の耐火金庫の中の貴重な資料は無事でした



▲卒業記念植樹のイチヨウは焼け、翌年には芽が出た

この800m先の定点と言われた所では多数の方が火砕流の犠牲となったのですが、火砕流は校舎裏手の水無川に沿って流れを変えたため、対照的に児童や教員は無事だったという。写真には、指示する先生や校舎から走り出る児童が写っています。1991年6月3日16時8分に撮られた火砕流が噴煙を上げながら下っていく様子は恐怖と絶望しかありません。この火砕流がきっかけとなって小学校は別の場所に仮移転し、3か月後の9月15日に無人となった校舎を火砕流が襲い、周辺の民家も熱風で焼け落ちたとのこと。今、私たちは旧大野木場小学校のこの時の姿を見ているのです。何とも言えない恐怖と悲しさ。

被災した旧大野木場小学校を見ていると、熱風の温度が低かったのか3階の教室に旧型テレビがそのままの姿で残っています。また、大石カイドから校長室の耐火金庫を後日取り出し、開けると古いアルバムなど貴重な学校の歴史を物語る資料が無事焼けずに残っていたとのこと。



「旅とビルと建築 2021.6.4の記事から転載」 火砕流と旧大野木場小学校の位置関係が分かる写真

被災した小学校の見学後、砂防みらい館の3階の屋上に行くと展望スペースが設けられており360度に視野が広がります。島原の市街地や目の前に被災した安中地区を見渡すことができます。土砂を運ぶトラックが遠方に見え、建設された砂防堰堤には土砂が堆積しています。



展望スペースから旧大野木場小学校、遠方には有明海



この人たちは火砕流で亡くなったとのこと

砂防みらい館に掲げてある前ページ写真には、火砕流が迫っている緊迫した状況にあっても(注、学者からの火砕流の危険性は伝わらなかった)、通称で定点(報道関係者が土石流や火砕流の撮影の拠点としていた場所)の位置で報道関係者が火砕流を見ながらカメラやビデオに収録している後ろ姿が残っている。カイドによれば、運転手は警察官から早く避難するよう警告されていたものの、お客のカメラマンが仕事で待っていたところ犠牲になったそうだ。



土砂を止め、水を通す管が設置されている



高さ8㍎の砂防堰堤

火砕流が流下し尊い人命が失われた安中地区では、砂防堰堤が設置されるなど砂防事業が行われています。ここで葉タバコが栽培され、人々が生活していた当時の穏やかな生活を思うと、いたたまれなくなります。

【土石流被災家屋保存公園の見学で分かったこと】

最後の見学地、土石流被災家屋が保存展示してある場所に移動しました。バスには、大石ガイドや松尾ガイドも同乗され、車中から案内。松尾ガイドによる普賢岳噴火災害のあれやこれなど素晴らしい説明で前職はバスガイドでは？と思えるほど見事な話しぶりに一同感心するやら驚くやら有意義な移動時間でした。

「ここが火砕流の最長流下地点(筆者注、火口から5、6キロ)ですよ」「堆積した土砂は当初お金を払って運搬してもらっていたが、市民で何とかするとなって現在のような住宅地などになっている」「ご健在だが当時の鐘ヶ江市長は警戒区域を設定し、住民の立ち入り禁止措置をとったので非難ごうごうだったが、大火砕流が発生してからは大いに評価が上がった」「噴火災害のことをよく理解していただくのもガイド次第ですね」など、まさに名調子とも言える口調での案内に聞き入ってしまったほどでした。



国土交通省九州整備局提供の土石流災害の写真



保存公園の入り口で土石流被害地域の説明があり、特に3棟が保存されている大型テントに向かいました



完全に土砂に埋まった家屋。当時は新築したばかりの住宅だったのか、家人の悔しい思いが迫ります

この公園の周辺は約2.8~3mほど土砂物で埋没したとのことですが、土砂物の流れてくるスピードが緩やかだったため倒壊せず土砂物に埋もれたそうです。かなり前にここを訪れた際、土砂に埋没した家屋が野ざらし状態で雑草が生い茂り、屋根だけが見える家や傾いた電柱、崩壊した家屋の一部などが見られ、相当の恐怖感が漂っていたのを思い出しました。

ところで、展示家屋の一部は解体されています。島原市と南島原市に挟まれた水無川流域では、1992年8月8日から14日にかけて土石流によって多くの家屋や田畑が埋没した。この公園は被災家屋11棟を当時の状況のまま現地に保存し1999年4月から展示されており、土石流災害の恐ろしさを今に伝えている。このうち、8棟が屋外に展示されていたが、屋根の崩落や柱のひずみなどの経年劣化が進行しているとされ、うち2棟は倒壊の危険性が高く、地盤沈下で陥没する恐れがあることから管理者である長崎県などが昨年解体を決めていたもので、23日に解体工事が始まった。(2021.12.24の毎日新聞の記事)

長年月の経過は当時の記憶が薄れ、市民であっても平成噴火による火山災害を知らない若い人が増えていると松尾ガイドが話されていた。当時はこの災害の状況が毎日のように報道されていて、日本中の耳目を集めていたのを思い出したが、土石流災害の危険性は今でもあり、砂防堰堤に土砂が堆積している状況を目のあたりにして、この災害は記憶とともに続いているなあと感じました。

【参考までに】

ここで、今回の防災セミナーを計画する際に参考にした資料：平成噴火災害の特徴と整備された災害学習施設について（出典「大阪公立大学の被災地における災害の語り部と科学知：島原半島ジオパークにおけるガイドや語り部の動向」）、を次のとおり紹介します。

この噴火の特徴は火砕流と土石流である。1991年5月20日に始まった溶岩噴出により形成された溶岩ドームの一部が崩落し、火砕流となって半島東部の島原市、深江町(現・南島原市深江町)方向へ流れ下り、44名の死者・行方不明者を出すなど大惨事となった。…略… また、噴火により降り積もった火山灰は、豪雨時に土石流を誘発し、水無川流域で多くの建物や農地の被害をもたらした。

こうした火砕流や土石流によって半島東部の国道や鉄道が寸断されるなど、地域社会インフラにも大きな被害を出した。地域住民は長期にわたる避難生活を余儀なくされ、人口の流出も続いた。観光客数は半島全体で減少し、観光業をはじめとする産業は大打撃を受けた。そこで、1997年に島原半島全体の再生と活性化を目指す「島原地域再生行動計画(通称：がまだす計画)」が策定された。

災害遺構としては、「旧大野木場小学校被災校舎」と「土石流被災家屋保存公園」の2カ所が一般に公開されている。2002年には被災校舎に隣接して国土交通省の砂防工事監視施設及び案内施設である大野木場砂防みらい館も開設され、火山・砂防学習拠点の一つとなっている。…略… 雲仙岳災害記念館は、がまだす計画の重点プログラムの一つとして2002年に開業した。

以上のように、災害遺構や災害記念館といった火山災害学習体験施設は、観光客や地域内外の子どもたちの学習の場であり、ガイドや語り部の活動を通して災害の伝承と教訓を伝える役割を果たす場となっている。

【最後に、平成噴火による災害後に、この地で行われている防災対策の取り組みなど幾つかを紹介します】

○ 島原市安中地区の取り組み 「普賢岳大火砕流あす30年 火山災害は必ず来る」抜粋 (2021.6.2)

壊滅的な被害に遭った普賢岳東側の麓の島原市安中地区(33町内会)では、溶岩ドーム崩落など次なる火山災害に備え、形骸化していた自主防災会を再生させ、災害と記憶の風化を防ぐ住民主体の取り組みが進められている。

約2年半前(筆者注、2019年)、安中地区全体の自主防災会長の横田哲夫さんと町内会連絡協議会長の阿南達也さんは、行政ではなく「住民主体」を合言葉に自主防災会の立て直しに着手した。火山災害後に市が各町内会に結成した自主防災会だが、終息宣言(筆者注、1996年)以後は活動が低調化。会長の多くが町内会長と兼務し、防災訓練が形式的になりつつあったからだ。

ドーム崩落の危機が迫る中、横田さんたちはまず危機管理の中心的役割を担う自主防災会長に専門知識がある消防や警察OBらを据え、町内会長との兼務を廃止。知識・経験を蓄積させるため任期は3年以上必要だと市長に働きかけ、組織を改善、強化した。

2019年以降は、毎年秋に独自の防災マップづくりのほか、国交省などの行政、地元の消防団・学校・福祉施設などと連携した本格的な防災訓練を主催、「住民の防災への意識も絆も強まった」(阿南会長)と成果を強調する。市は安中地区と同様に全市域で自主防災会の強化に取り組む考えだ。



横田(中央右)、阿南(左端)両会長

防災訓練で段ボールベッドの組み立てを学ぶ安中地区の住民

○ 大野木場小学校の取り組み 南島原市ニュース抜粋 (令和6年8月30日)

今から33年前、雲仙・普賢岳の災害は、旧深江町と島原市をはじめ、島原半島に甚大な被害をもたらしました。平成3年9月15日には、当時の大野木場小学校の校舎や体育館が火砕流によって焼失した。大野木場小学校では例年9月15日をメモリアルデーとし、噴火災害の記憶を語り継ぐとともに、自然災害に対する防災意識を高める機会としてきました。メモリアルデー2024は、災害学習に取り組んだ5年生による発表やコリンズ知佳さんの講話、噴火災害を受け生き残ったイチヨウの木をモチーフにした詩の朗読や歌「生きていたんだね」を全校児童で合唱して、これからも噴火災害のことを伝えていくことを誓いました。

○ 島原市による取り組み

火山防災強化市町村ネットワーク
NEWSLETTER

(情報提供) 島原市

第4号 (令和3年1月)

■ 日本一の自主防災組織と災害に強いまちづくりの取り組み

令和3年は、雲仙・普賢岳噴火災害から30年の節目の年となります。

島原市では、噴火災害を経験した被災地だからこそ「自助・共助・公助」を市民に浸透させ、機能的で実行力のある日本一の自主防災組織を作り、災害に強いまちづくりを目指しています。

■ 防災避難訓練及び地域防災マップの作成支援

自主防災会を中心として、小・中学校の児童生徒、保育園や福祉施設など地域一体となった市主催の防災避難訓練を市内4地区に分けて実施しています。

また、噴火災害で被災した安中地区では、毎年、自主防災会主催による避難訓練が実施され、地域における「顔の見える関係」の構築が図られています。

なお、自主防災会単位での地域防災マップの作成支援も進めています。



小学校から避難する児童
(日曜日を登校日として参加しています。)



自衛隊車両による要支援者の
搬送訓練



自主防災会と消防団など関係機
関と連携して、地域防災マップ
を作成

■ 防災視察登山と砂防事業現地視察

雲仙・普賢岳の現状確認のための防災視察登山を5月と11月の年2回、防災関係機関と合同で実施しています。また、国土交通省が実施している砂防事業を地元自主防災会に周知するための現地視察などの取り組みを実施しました。



関係機関による平成新山 (1,483m) 防災登山



国土交通省による地元自主防災会への雲
仙・普賢岳の砂防事業の現地視察

【問合せ先】

長崎県島原市市民部市民安全課

TEL : 0957-63-1111 (内線241)

E-mail : anzen@city.shimabara.lg.jp

事務局 (鹿児島市危機管理課)

TEL : 099-216-1513

E-mail : kiki-kazan@city.kagoshima.lg.jp



がまだすドーム見学後、巨岩の前で記念撮影。後方に長崎県で一番高い平成新山が見えます

【あしがき】

今回、開成まちづくり協議会(会長 副島基司氏)の専門部会である生活・環境部会(部会長 吉田和孝氏)と開成校区自主防災会(会長 大久保清海氏)とで「雲仙・普賢岳平成噴火による災害を学ぶ防災セミナー」を合同で開催し、がまだすドームや旧大野木場小学校被災校舎等災害遺構をジオガイドの熱心な説明を聞き見学・学習できたことにより、私たちは危機管理意識の向上と防災訓練等防災対策の実践がいかに大切かを実感することができ、大変有意義なものでした。大石ガイドや松尾ガイドに心からの感謝を申し上げます。ありがとうございました。そして、長時間に及んだこのセミナーに参加された皆さん、大変お疲れさまでした。

今日の成果を参考に、これからもそれぞれの役割を認識し、ふるさと開成のまちづくりや地域防災活動に取り組んでいきたいとの思いを胸に歩みを進めていきたいと思います。

最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。これから冬本番となりますが、どうぞご自愛ください。